

いちようの実

宮沢賢治

青空文庫

そらのてつぺんなんかつめたくてつめたくてまるでカチカチの
 やきをかけた鋼はがねです。

そして星ほしがいつぱいです。けれども東ひがしの空そらはもうやさしいきき
 ようの花はなびらのようにあやしい底そこ光ひかりをはじめました。

その明け方あの空がたの下そら、ひるの鳥とりでもゆかない高いたかところをする
 どの霜しものかけらが風かぜに流ながされてサラサラサラ南みなみのほうへとん
 でゆきました。

じつにそのかすかな音おとが丘おかの上うえの一本ほんいちようの木きに聞きこえる
 くらいすみきった明け方あです。

いちようの実みはみんないちどに目めをさしました。そしてドキ

ツとしたのです。きようこそはたしかに旅だちの日でした。みんなも前からそう思っていましたし、きのうの夕方やつてきた二わのガラスも素晴らしいました。

「ぼくなんか落ちるとちゆうで目がまわらないだろうか。」一つの実が良かったです。

「よく目をつぶっていけばいいさ。」も一つが答えました。

「そうだ。わすれていた。ぼく水とうに水をつめておくんだった。」

「ぼくはね、水とうのほかにはつか水を用意したよ。すこしやろうか。旅へ出てあんまり心持ちのわるいときはちよつと飲むといいっておつかさんがいったぜ。」

「なぜおつかさんはぼくへはくれないんだろう。」

「だから、ぼくあげるよ。おつかさんをわるく思おもつちやすまないよ。」

そうです。このいちようの木きはおかあさんでした。

ことしは千人にんの黄金きんいろの子こどもが生まうまれたのです。

そしてきようこそ子こどもらがみんないっしょに旅たびにたつのです。

おかあさんはそれをあんまり悲かなしんでおうぎ形がたの黄金きんの髪かみの毛けをきおのうまでにみんな落おとしてしまいました。

「ね、あたしどんなところへいくのかしら。」ひとりのいちようの女おんなの子こが空そらを見みあげてつぶやくようにいきました。

「あたしだってわからないわ、どこへもいきたくないわね。」も

ひとりがいいました。

「あたしどんなめにあつてもいいから、おつかさんとここにいたいわ。」

「だっていけないんですつて。風が毎日かぜ まいにちそういったわ。」

「いやだわね。」

「そしてあたしたちもみんなばらばらにわかれてしまふんでしよう。」

「ええ、そうよ。もうあたしなんにもいらないわ。」

「あたしもよ。今いままでいろいろわがままばつかしいってゆるしてくださいね。」

「あら、あたしこそ。あたしこそだわ。ゆるしてちようだい。」

ひがしそら
東の空のききよはなうの花びらはもういつかしぼんだようにちから力なくなり、朝あきの白しろ光びかりがあらわれはじめました。星ほしが一つずつきえてゆきます。

木きのいちばんいちばん高たかいところおとこにいたふたりのいちようの男の子こがいいました。

「そら、もう明あかるくなつたぞ。うれしいなあ。ぼくはきつと黄きん金色いろのお星ほしさまになるんだよ。」

「ぼくもなるよ。きつとここから落おちればすぐ北きた風かぜが空そらへつれてつてくれるだろうね。」

「ぼくは北きた風かぜじゃないと思おもうんだよ。北きた風かぜはしんせつじやないんだよ。ぼくはきつとからすさんだろうと思おもうね。」

「そうだ。きつとからすさんだ。からすさんはえらいんだよ。ここから遠とおくてまるで見えなくなるまでひと息いきに飛とんでゆくんだからね。たのんだら、ぼくらふたりぐらいきつといっぺんに青あおぞらまでつれていってくれるぜ。」

「たのんでみようか。はやく来くるといいな。」

そのすこし下したでもうふたりがいました。

「ぼくはいちばんはじめにあんずの王おうさま様のお城しろをたずねるよ。

そしておひめ様さまをさらっていったばけものを退治たいじするんだ。そんなばけものがきつとどこかにあるね。」

「うん。あるだろう。けれどもあぶないじゃないか。ばけものは大おおきいんだよ。ぼくたちなんか、鼻はなでふきとばされちまうよ。」

「ぼくね、いいもの持っているんだよ。だからだいじょうぶさ。

見せようか。そら、ね。」

「これおつかさんの髪でこさえた網じゃないの。」

「そうだよ。おつかさんがくだすったんだよ。なにかおそろしいことのあるときはこのなかにかくれるんだって。ぼくね、この網をふところに置いてばけものに行つてね。もしもし。こんにちは、ぼくをのめますかのめないでしょう。とこういうんだよ。ばけものはおこつてすぐのむだろう。ぼくはそのときばけもの胃ぶくろのなかでこの網をだしてね、すっかりかぶつちまうんだ。それからおなかじゆうをめつちやめちやにこわしちまうんだよ。そら、ばけものはチブスになって死ぬだろう。そこでぼくはでて

きてあんずのおひめ様さまをつれてお城しろに帰かえるんだ。そしておひめ様さまをもらうんだよ。」

「ほんとうにいいね。そんならそのときぼくはお客きやくさま様さまになつていつてもいいだろう。」

「いいともさ。ぼく、国くにを半分はんぶんわけてあげるよ。それからおつ

かさんへは毎まい日にちおかしやなんかたくさんあげるんだ。」

星ほしがすっかりきえました。東ひがしの空そらは白しろくもえているようです。

木きがにわかになぎわざわしました。もう出しゅっ発ぱつに間まもないのです。

「ぼく、くつが小ちいさいや。めんどうくさい。はだしでいこう。」

「そんならぼくのとかえよう。ぼくのはすこし大おおきいんだよ。」

「かえよう。あ、ちようどいいぜ。ありがとう。」

「わたしこまってしまいわ、おつかさんにもらった新しいあたらしい外套がいとうが見えないんですもの。」

「はやくおさがしなさいよ。どのえだにおいたの。」

「わすれてしまったわ。」

「こまったわね。これからひじょうに寒さむいんでしょう。どうしても見みつけないといけなくってよ。」

「そら、ね。いいばんだらう。ほしぶどうがちよつと顔かおをだしてらだらう。はやくかばんへ入いれたまえ。もうお日ひさまがおでましになるよ。」

「ありがとう。じゃもうよ。ありがとう。いっしょにいこうね。」

「こまったわ、わたし、どうしてもないわ。ほんとうにわたしどうしましよう。」

「わたしとふたりでいきましようよ。わたしのをときどきかしてあげるわ。ここへいたらいつしよに死しにましようよ。」

ひがしそらしろ

東の空が白くもえ、ユラリユラリとゆれはじめました。おっかさんの木はまるで死しんだようになってじつと立たっています。

とつぜん光ひかりのたばが黄金きんの矢やのように一度どにとんできました。子どもらはまるでとびあがるくらいかがやきました。

北きたから氷こおりのようにつめたいすきとおった風かぜがゴーツとふいてきました。

「さよなら、おっかさん。」 「さよなら、おっかさん。」 子ども

らはみんな一度に雨あめのようにえだからとびおりました。

北風きたかぜがわらって、

「ことしもこれでまずさよならさよならっていうわけだ。」とい
いながらつめたいガラスのマントをひらめかしてむこうへいつて
しまいました。

お日様ひさまはもえる宝石ほうせきのように東ひがしの空そらにかかり、あらんかぎりの
かがやきを悲かなしむ母親ははおやの木きと旅たびにでた子どもらとに投なげてお
やりなさいました。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店——宮沢賢治童話集 二」青い鳥文庫、
講談社

1985（昭和60）年1月24日第1刷発行

2004（平成16）年6月7日第52刷

入力：劉斗

校正：小林繁雄

2011年3月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

いちょうの実

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>